

中国における『無量寿経論』テキストの受容

辻本俊郎

一、問題の所在

近年になってようやく漢文仏典も本格的な研究対象となってきたようである。しかしながら、世親 (Vasubandhu) 西暦四〇〇〜四八〇年) 著、菩提流支 (Bodhiruci) 訳『無量寿経論』(以下、『論』とする)¹⁾ に関していえば、十分に評価され、研究されてきたと言えない。その理由はいくつか考えられよう。

まず一つには曇鸞(西暦四七六〜五四二年?) によって『論』の全文がその著『無量寿経論註』(以下、『論註』とする) に引用されており、浄土系の宗学的な立場から『論』の研究よりも『論註』の研究に重きを置かれたということがあるだろう。

また、明治以降、新しい仏教研究が西洋よりもたらされた際、サンスクリット語原典の研究がその主流を占めるようになったため、『論』のようにサンスクリット語原典が現存しないテキストは、二次的と考えられ、残念ながらその研究が遅れてしまったと考えられるのである。

しかしながら、『論』は、浄土系のみならず、華嚴系、天台系、律系などに多面的に大きな影響を残したことは

言うまでなく、その影響は中国だけではなく韓半島や日本の浄土教などにも及んだ。

実際、中国の諸師、すなわち、曇鸞、淨影寺慧遠（西暦五二三～五九二年）、智顛（西暦五三八～五九七年）、道綽（西暦五六二～六四五年）、善導（西暦六一三～六八一年）、竜興（西暦六五五～七一二年？）、懷感（西暦七世紀）、迦才（西暦六四八年？）、智儼（西暦六〇二～六六八年）、慧淨（西暦五七八～六四五年）、窺基（西暦六三二～六八二年）、道世（西暦六六八年？）、道闇（西暦七世紀）、智昇（西暦七三〇年ごろ）、道鏡・善道（西暦九世紀）、延寿（西暦九〇四～九七五年）、知礼（西暦九六〇～一〇二八年）、元照（西暦一〇四八～一一一六年）、宗曉（西暦一一五一～一二一四年）の章疏に『論』が引用されている。^②曇鸞『論註』以外は、『論』の全文を引用しているわけではないが、中国の諸師が一般に用いられていたテキストの形態を知ることができる貴重な資料であると見えよう。

改めて言うまでもなく、『論』には菩提流支訳の漢訳が一本あるのみである。問題は、この漢訳がさまざまなテキストによってずいぶんと字句に異同があつて、場合によつては解釈に相違の出ることさえあるという点である。この点に関して筆者は以前具に調査を試みたこと^③がある。その結果、『論』は、大きく『論』系と『論註』抽出本系の二つに分類されることである。^④この両者は驚くべきことにわずか三千字足らずの書物にかかわらず、およそ二〇〇字も字句の異同があり、しかも、改行箇所も全く異なるのである。また、さらに細かく前者は宋版系統、高麗再雕版系統、古写本系統、後者は流布本系統に分類できるのである。^⑤ここでいう古写本というのは、平安時代の書写本であるが、奈良時代の写本の転写本であり、大蔵経の成立よりかなり古く、落合俊典（二〇〇九）によると、「隋唐仏教文献の、忠実な或いはやや忠実な写本が日本の古写本ということである」としている。したがつて、ここでは、成立年代ができるだけ訳者菩提流支の時代に近いテキスト、つまり、古写本（ここでは正倉院聖語

蔵本を使用する)、曇鸞『論註』からの抽出本、房山雷音洞石刻本(隋末唐初)などを中心に彼此照合しながら、中国の諸師が引用した『論』本文を精査することによって、彼らが実際に見た『論』テキストを明らかにし、北魏時代から宋時代まで『論』テキストの流伝の形跡を辿って、彼らが見た『論』テキストを確定させ、伝播状況を明らかにする。

二、北魏・曇鸞の見た『無量寿経論』テキスト

道宣(西暦五九六〜六六七)『続高僧伝』によると曇鸞は直接、菩提流支に出会って『観無量寿経』を授かったという。筆者はこの時『論』も授かったと考えている。⁽⁶⁾曇鸞はその『論』に註を施して『論註』を著した。これ以外にも『讚阿弥陀仏偈』、『略論安楽浄土義』を著した。この中で『略論安楽浄土義』には二九種の浄土莊嚴の様子を『論』本文そのままではないが、要約している。すなわち、

・若依無量寿論。以二種清淨。撰二十九種莊嚴成就。二種清淨者。一器世間清淨。二是衆生世間清淨。器世間清淨有十七種莊嚴成就。一者国土相勝過三界道。二者其国広大量如虚空無有齋限。三者從菩薩正道大慈悲出世善根所起。四者清淨光明圓滿莊嚴。五者備具第一珍宝性出奇妙宝物。六者潔淨光明常照世間。七者其国宝物柔軟觸者適悅生於勝樂。八者千万宝華莊嚴池沼宝殿宝樓閣種種宝樹雜色光明影納世界。無量宝網覆虚空四面懸鈴常吐法音。九者於虚空中自然常雨天華天衣天香莊嚴普熏。十者仏慧光明照除痴闇。十一者梵声開悟遠聞十方。十二者阿弥陀仏無上法王善力住持。十三者從如来淨華所化生。十四者愛樂仏法味禪三昧為食。十五者永離身心諸苦受樂無間。十六者乃至不聞二乘女人根欠之名。十七者衆生有所欲樂随心称意無不満足。如是等十七種是名器世間清淨。衆生世間清淨有十二

種莊嚴成就。一者無量大珍宝王微妙華台以為仏座。二者無量相好無量光明莊嚴仏身。三者仏弁才応機說法具足清白令人樂聞者必悟解言不虛説。四者仏真如智慧猶如虚空照了諸法總相別相心無分別。五者天人不動衆廣大莊嚴譬如須弥山映顯四大海法王相具足。六者成就無上果尚無能及況復過者。七者為天人丈夫調御師大衆恭敬圍繞。如師子王師子圍繞。八者仏本願力莊嚴住持諸功德遇者無空過能令速滿足一切功德海。未証淨心菩薩畢竟得証平等法身与淨心菩薩与上地菩薩畢竟同得寂滅平等。九者安樂國諸菩薩衆身不動揺而遍至十分種種応化如実修行常作仏事。十者如是菩薩応化身一切時不前不後一心一念放大光明悉能遍至十方世界。教化衆生種種方便修行所成滅除一切衆生苦惱。十一者是等菩薩於一切世界無余照諸仏大会無余广大無量供養恭敬讚歎諸仏如来功德。十二者是諸菩薩於十方一切世界無三宝処住持莊嚴仏法僧宝功德大海遍示令解如実修行。如是等法王八種莊嚴功德成就。如是菩薩四種莊嚴功德成就。是名衆生世間清淨。(大正四七・一上〜下)

である。ここでは『論』本文そのものの引用ではなく、要約文であるので確定的なことは言えないが、果たして曇鸞が『略論安樂浄土義』を著作する上で、参照した『論』テキストが何だったのであろうか。そこで、その示唆となる文と古写本などと対照させてみる。

① 梵声開悟遠聞十方

『論註』抽出本、『論註』、古写本テキスト、房山雷音洞石刻本では「梵声悟深遠」となっている。ところが、曇鸞より年代ははるかに下がるが高麗再雕本などでは「梵声語深遠」となっている。

② 未証淨心菩薩畢竟得証平等法身与淨心菩薩与上地菩薩畢竟同得寂滅平等。

『論註』抽出本、『論註』では「未証淨心菩薩畢竟得証平等法身与淨心菩薩与上地菩薩畢竟同得寂滅平等」とあり、『略論安樂浄土義』と全く同文であるが、古写本では、「未証淨心菩薩畢竟得証平等法身与淨心菩薩無

異淨心菩薩与上地菩薩畢竟同得寂滅平等」となっており、どういふわけか「無異淨心菩薩」の語が追加されているのである。

③ 一切世界無余照諸仏大会無余廣大無量供養恭敬讚歎諸仏如来功德。

『論註』抽出本、『論註』では「一切世界無余照諸仏大会無余廣大無量供養恭敬讚歎諸仏如来功德」となっており、これも先の②同様、全く一致しているのであるが、古写本では、「一切世界無余照諸仏大会無余廣大無量供養恭敬讚歎諸仏如来」となっており、最後の「功德」という字句が見られないのである。

以上のことから、曇鸞は我々が現在手にする古写本系などではなく、自ら著した『論註』もしくは『論註』抽出本を座右に置いていたことが言えよう。このことは『論』訳出当初の状況を示唆しているものと考えられる。ただし、注意しなければならないことは、これはあくまでも曇鸞が見た『論』であって、菩提流支より授かった『論』と同じものかどうか、現在のところ明らかではないということである。

三、隋代の諸師が見た『無量寿経論』テキスト

隋代には淨影寺慧遠『無量寿経義疏』・『觀無量寿経義疏』、智顛偽撰『淨土十疑論』に『論』が引用されている。しかしながら、この中で淨影寺慧遠『無量寿経義疏』の引用は『論』各テキストの字句の異同がないため、どのテキストを参照したのかという手掛かりはない。したがって、ここでは、淨影寺慧遠『觀無量寿経義疏』と智顛偽撰『淨土十疑論』を採りあげる。

まず、淨影寺慧遠『觀無量寿経義疏』であるが、『論』本文の引用は次の通りである。

・依往生論五門為因。一 礼拝門称名礼拝阿弥陀仏求生其国。二 讚嘆門讚阿弥陀仏光明智慧一切徳。三 作願門願生其国修弥陀仏所行所成。四 觀察門所觀有三。一 觀彼国功德莊嚴。二 觀彼仏功德莊嚴。三 觀彼菩薩功德莊嚴。各有多義不可具列。五 迴向門不捨苦生迴向為首所作功德迴以施之共生彼国。(大正三七・一八三上)

・依如往生論中説。二乗種不得往生。(大正三七・一八四中)

・彼往生論據終為言故説。二乗種子不生。(大正三七・一八四中)

・依如往生論中宣説。女人根欠不生。(大正三七・一八四中)

この中で指標となるのが、「一 觀彼国功德莊嚴。二 觀彼仏功德莊嚴。三 觀彼菩薩功德莊嚴」に見られる「功德莊嚴」である。すなわち、『論註』抽出本、『論註』では「一者觀察彼仏国土莊嚴功德」となっているのに対し、古写本では、「一者觀察彼仏国土功德莊嚴」となっており、このことは浄影寺慧遠は、『論註』抽出本ではなく、古写本系を見ていたことを意味している。したがって、菩提流支による『論』訳出は西暦五二九年、あるいは五三一年であり、曇鸞は西暦六世紀前半に、浄影寺慧遠は六世紀後半に活躍したことを考えると訳出後、早い時期にすでに二系統の『論』テキストが存在・流布していたことになる。

次に智顛偽撰『浄土十疑論』に引用されている『論』を見てみよう。

・又往生論云。女人及根欠二乗種不生。(大正四七卷・八〇中)

・故往生論云。言発菩提心者。正是願作仏心。願作仏心者。則是度衆生心。度衆生心者。則是摂衆生心。願生浄土須具二行。一者必須遠離三種障菩提門法。二者須得三種順菩提門法。何者為三種障菩提門法。一者依智慧門。不来自染遠離我心貪著自身故。二者依慈悲門。拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。三者依方便門。當憐愍一切衆生欲与其樂。遠離恭敬供養自身身故。若能遠三種菩提障。則得三種順菩提法。一者無染清浄心。不為自身求諸樂故。

菩提は無染清淨心。若為自身求樂。即染身心障菩提門。是故無染清淨心。是順菩提門。二者安清淨心。為拔衆生苦故。菩提心是安穩一切衆生清淨心。若不作心拔一切衆生。令離生死苦。即違菩提門。是故安清淨心。是順菩提門。三者樂清淨心。欲令一切衆生得大菩提涅槃故。(大正四七・八一上)

今、太字で記した文は、『論』本文には見られず、『論註』に見られるのである。その箇所を挙げてみよう。すなわち、

【『論註』】一者無染清淨心。不為自身求諸樂故。菩提は無染清淨心。若為自身樂。即違菩提是故無染清淨心。是順菩提門。二者安清淨心。以拔衆生苦故。菩提心是安穩一切衆生清淨心。若不作心拔一切衆生。離生死苦。即便違菩提是故拔一切衆生故。是順菩提門。(真宗勸学寮(一九二五)下卷四四頁)

このように『浄土十疑論』では、「往生論云」と記しておきながらも、実際には『論』本文だけでなく、『論註』の文も引用しているのである。このことは『浄土十疑論』の著者が『論』ではなく、曇鸞『論註』そのものを座右に置いて著したことを意味しているのである。

以上のことをまとめると、隋代においては古写本系、『論註』が確認されたのである。

四、唐代の諸師が見た『無量寿経論』テキスト

唐代においては道綽『安樂集』、善導『往生礼讚偈』、善導『観無量寿仏経疏』、竜興『観無量寿経記』、懷感『釈浄土群疑論』、迦才『浄土論』、智儼『華嚴経内章門等雜孔目』、慧浄『阿弥陀経義述』、窺基『観弥勒菩薩上兜率天経贊』、窺基『大乘法苑義林章』、窺基偽撰『阿弥陀経疏』・『阿弥陀経通贊疏』・『西方要決疑通規』、道世『法苑

珠林・『諸経要集』、道闇『観無量寿経疏』、智昇『集諸経礼懺儀』、智顛偽撰『仏説観無量寿仏経疏』、道鏡・善道『念仏鏡』が『論』を引用しているのである。しかしながら、この中で、善導『観無量寿仏経疏』⁹、懷感『釈浄土群疑論』¹⁰、慧浄『阿弥陀経義述』¹¹、窺基『観弥勒菩薩上兜率天経贊』¹²、窺基『大乘法苑義林章』¹³、窺基偽撰『阿弥陀経疏』¹⁴、窺基偽撰『阿弥陀経通贊疏』¹⁵、窺基偽撰『西方要决积疑通規』¹⁶、道世『法苑珠林』¹⁷、道世『諸経要集』¹⁸、道闇『観無量寿経疏』¹⁹、智顛偽撰『仏説観無量寿仏経疏』²⁰、道鏡・善道『念仏鏡』²¹はどの『論』テキストかを判定するよ
うな文を引用せず、すなわち、手掛かりはないのである。

したがって、道綽『安楽集』、善導『往生礼讃偈』、竜興『観無量寿経記』、迦才『浄土論』、智儼『華嚴経内章門等雜孔目』、智昇『集諸経礼懺儀』について検討する。

まず道綽『安楽集』に引用された『論』を見てみよう。『安楽集』が『論』を引用しているのは次の三か所である。

・天親菩薩論云。若能観二十九種莊嚴清浄。即略入一法句。一法句者謂清浄句。清浄句者即是智慧無為法身故。何故須広略相入者但諸仏菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身故。生方便法身。由方便法身故。顯出法性法身。此二種法身異而不可分。一而不可同。是故広略相入。菩薩若不知広略相入。則不能自利利他。(大正四七・七上)

・天親浄土論云。凡欲発心会無上菩提者有其二義。一者先須離三種与菩提門相違法。二者須知二種順菩提門法。何等為三。一者依智慧門不求自樂。遠離我心貪著自身故。二者依慈悲門拔一切衆生苦。遠離無安衆生心故。三者依方便門憐愍一切衆生心。遠離恭敬供養自身心故。是名遠離三種菩提門相違法。順菩提門者菩薩遠離如是三種菩提門相違法。即得三種隨順菩提門法。何等為三。一者無染清浄心。不為自身求諸樂故。菩提是無染清浄処。若為自

身求樂。即違菩提門。是故無染清淨心。是順菩提門。二者安清淨心。為拔一切衆生苦故。菩提安穩一切清淨處。若不作心拔一切衆生離生死苦。即便違菩提。是故拔一切衆生苦是順菩提門。三者樂清淨心。欲令一切衆生得大菩提故。攝取衆生彼國土故。菩提是畢竟常樂處。若不令一切衆生得畢竟常樂者則違菩提門。此畢竟常樂依何而得。要依大義門。大義門者謂彼安樂仏國是也。(大正四七・八上)

・淨土論云。十方人天生彼國者即與淨心菩薩無二。淨心菩薩即與上地菩薩畢竟同得寂滅忍。(大正四七・一九下) ここでは改めて言うまでもなくすでに岸一英(一九九九)が、道綽が『論』としながらも『論註』の文をも引用していることを指摘している。また、『論註』の引用は、『安樂集』が最初であり、『論註』のみを見て『安樂集』に引用していることに注意しなければならないとしている。右記の太字で著した箇所が、『論註』の文である。

善導『往生礼讃偈』には次のような『論』テキストが引用されている。すなわち、

・又如天親淨土論云。若有願生彼國者勸修五念門五門若具定得往生。何者為五。一者身業礼拝門。(中略) 二者口業讚歎門。(中略) 三者意業憶念觀察門。(中略) 四者作願門。(中略) 五者回向門。(大正四七・四三八下)

・天親菩薩願往生礼讃偈 (中略)

世尊我一心 歸命尽十方 無礙光如來 與仏教相應 (中略)

觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虛空 廣大無辺際 (中略)

正道大慈悲 出世善根生 淨光明滿足 如鏡日月輪 (中略)

備諸珍宝性 具足妙莊嚴 無垢光炎熾 明淨曜世間 (中略)

宝華千万種 弥覆池流泉 微風動華葉 交錯光乱転 (中略)

宮殿諸樓閣 觀十方無礙 雜樹異光色 宝欄遍圍遶 (中略)

無量宝交絡 羅網遍虚空 種種鈴鬘響 宣吐妙法音 (中略)
 梵音悟深遠 微妙聞十方 正覺阿弥陀 法王善住持 (中略)
 如来淨華衆 正覺華化生 愛樂佛法味 禪三昧為食 (中略)
 永離身心惱 受樂常無間 大乘善根界 等無譏嫌名 (中略)
 女人及根欠 二乘種不生 衆生所願樂 一切能滿足 (中略)
 無量大宝王 微妙淨華台 相好光一尋 色像超群生 (中略)
 天人不動衆 清淨智海生 如須弥山王 勝妙無過者 (中略)
 天人丈夫衆 恭敬遶瞻仰 雨天樂華衣 妙香等供養 (中略)
 安樂国清淨 常轉無垢輪 一念及一時 利益諸群生 (中略)
 讚仏諸功德 無有分別心 能令速滿足 功德大宝海。(大正四七・四四三上〜四四四上)

この中では「梵音悟深遠」、「讚仏諸功德」がどのテキストだったのかを判定する指標となってくる。まず、前者においては、『論註』抽出本や『論註』古写本、房山雷音洞石刻本では、「梵声悟深遠」となっており、高麗再雕版では、「梵声語深遠」となっており、善導の引用した語句と一致しないが、「悟」と「語」の点からいえば、『論註』抽出本や『論註』古写本、房山雷音洞石刻本を支持しているのである。また、後者においては、『論註』抽出本や『論註』古写本、房山雷音洞石刻本では「讚仏諸功德」、「論註」抽出本や『論註』では「讚諸仏功德」となっており、これらからすると、善導は古写本系統を見ていたであろう。²³⁾

次に竜興『観無量寿経記』を見てみよう。この書は早くから散逸して現存していない。しかし、恵谷(一九七六)が他書に引用された文を蒐集・整理して、ある程度復元に成功している。ここでは恵谷復元本を利用すると、

『論』引用文は次の通りである。

・如偈觀彼世界相。勝過三界道。(中略) 如偈究竟如虛空。廣大無辺際。(中略) 如偈淨光明滿足。如鏡日月輪。(中略) 如偈備諸珍寶性。具足妙莊嚴。(中略) 如偈無垢光炎熾。明淨曜世間。(中略) 如偈寶性功德草。柔軟左右旋。觸者生勝樂。過迦旃隣陀。(中略) 如偈寶華千萬種。弥覆池流泉。微風動華葉。交錯光乱転。(中略) 如偈宮殿諸樓閣。觀十方無碍。雜樹異光色。容欄遍困遶。(中略) 如偈無量容交洛。羅網遍虛空。種々鈴發響。宣吐妙法音。(中略) 如偈雨華衣莊嚴。無量香普熏。(中略) 如偈仏恵明淨日。除世痴闇冥。(中略) 如偈梵声悟深遠。微妙門十方。(中略) 如偈正覺阿弥陀。法王善住持。(中略) 如偈如来淨華衆。正覺華化生。(中略) 如偈愛樂仏法味。禪三昧為食。(中略) 如偈永離身心惱。受樂常無間。(中略) 如偈大乘善根界。等無譏嫌名。女人及根欠。二乘種不生。(中略) 如偈衆生所願樂。一切能滿足。(中略) 如偈無量大寶王。微妙淨華台。(中略) 如偈相好光一尋。色像超群生。(中略) 如偈如来微妙声。梵響聞十方。(中略) 如偈同地水火風。虚空無分別。(中略) 如偈天人不動衆。清淨智海生。(中略) 如偈如須弥山王。勝妙無過者。(中略) 如偈天人丈夫衆。恭敬遶瞻仰。(中略) 如偈觀仏本願力。遇無空過者。能令速滿足。功德大宝海。(中略) 一身不動揺而遍十方種々応化常作仏事。(中略) 如偈安樂國清淨。常転無垢輪。化仏菩薩日。如須弥住持。(中略) 二彼応化身一時念放大光明除衆生苦。如偈無垢莊嚴光。一念及一時。普照諸仏会。利益諸群生。三於一切世界廣大無量供養恭敬讚歎諸仏。如偈雨天樂華衣。妙香等供養。讚仏諸功德。無有分別心。四於十方世界無三宝処遍至令解如実修行。如偈何等世界無。仏法功德宝。我願皆往生。示仏法如仏。(恵谷(一九七六)三七一―三七二頁)

この中で「梵声悟深遠」、「讚仏諸功德」、「我願皆往生」の三つの句が竜興によつて参照された『論』テキストを示す指標の役目を果たすのである。「梵声悟深遠」、「讚仏諸功德」については前述したように、古写本、房山雷

音洞石刻本を支持しているが、「我願皆往生」については古写本では「我皆願往生」となっており、『論註』抽出本や『論註』、房山雷音洞石刻本では「我願皆往生」となっており、『論註』抽出本や『論註』、房山雷音洞石刻本を支持している。ということは、竜興が見た『論註』テキストは、ある箇所では古写本に、ある箇所では『論註』抽出本や『論註』に一致することから考えると、完全に一致するものがないことから残念ながら竜興が見た『論註』テキストを確定することはできない。

次に迦才『浄土論』に引用された『論』を見てみよう。

- ・ 故往生論云。大乘善根界。等無譏嫌名。女人及根欠。二乘種不生也。(大正四七・八四下)
- ・ 又如往生論說。修五念門即得往生。何等五念。一者禮拜。二者讚歎。三者觀察。五者迴向。(大正四七・八九上)

・ 如往生論說。女人及根欠二乘種不生。(大正四七・九一中)

・ 一如往生論云。若善男子善女人修五念門行成就者畢竟得生安樂国土見彼阿彌陀仏。何等五念。一者禮拜。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向。復有五種門漸次成就五種功德。何者五門。一者近門。二者大会衆門。三者宅門。四者屋門。五者園林遊戲池門。此五種門初四種門成就入功德。第五門成就出功德。入第一門者以禮拜阿彌陀仏為生彼國故得生安樂世界。是名入第一門。入第二門者以讚歎阿彌陀仏隨順名義稱如來名依如來光明智相修行故得入大会衆數。是名入第二門。入第三門者以一心專念作願生彼修奢摩他寂靜三昧行故得入蓮華藏世界。是名入第三門。入第四門者以專念觀察彼妙莊嚴修毘婆舍那故得到彼処受用種種法味樂。是名入第四門。出第五門者以大慈悲觀察一切苦惱衆生示応化身。迴入生死園煩惱林中遊戲神通至教化地以本願力迴向故。是名出第五門。菩薩入四種門自利行成就應知。菩薩出第五門利益他迴向行成就應知。菩薩如是修五門行自利他速成就阿耨多羅三藐三菩提

故。(大正四七・九四下〜九五上)

これらの中でポイントとなるのは次の文である。

①【迦才】若善男子善女人修五念門行成就者畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。

【古写本】若善男子善女人修五念門成就者畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。

【論註】抽出本】若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安樂国土見彼阿弥陀仏。

②【迦才】菩薩出第五門利益他迴向行成就應知。

【古写本】菩薩出第五門利益他迴向行成就應知。

【論註】抽出本】菩薩出第五門迴向利益他行成就應知。

③【迦才】菩薩如是修五門行自利利他速成就阿耨多羅三藐三菩提故。

【古写本】菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。

【論註】抽出本】菩薩如是修五念門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。

ここでは、②では古写本系を支持しているが、①や③では、完全に一致したテキストは見られないため、竜興と同様残念ながら迦才が参照した『論』テキストを確定することはできない。

次に智儼『華嚴經内章門等雜孔目』に見られる『論』本文を検討しよう。

・又往生論。(中略) 畢竟得生安樂国土見阿弥陀仏。一者禮拜門。二者讚歎門。三者作願門。四者觀察門。五者迴向門。云何禮拜。身業礼阿弥陀如来 心正遍知。為生彼国意故。云何讚嘆。口業讚嘆。称彼如来名。如彼如来光明智相。如彼名義。欲如実修行相応故。云何作願。心常作願。一心專念畢竟往生安樂国土。欲如実修行奢摩他故。云何觀察。智慧觀察。正念觀彼。欲如実修行毘婆舍那故。広如論説。云何迴向。(中略) 復有五種門。漸次成就五種

功德。一者近門。二者大衆門。三者宅門。四者屋門。五者園林遊戲地門。初四種門。成就入功德。第五門成就出功德。入第一門者。以禮拜阿彌陀仏為生彼国故。得生安樂世界。入第二門者。以讚嘆阿彌陀仏。隨順名義。稱如來名。依如來光明相心修行故。得入大衆數。入第三門者。以一心專念作願生彼。修奢摩他寂靜三昧行故。得入蓮華藏世界。入第四門者以專念觀察彼妙莊嚴。修毘婆舍那故。得到彼処受用種種法味樂。出第五門者以大慈悲。觀察一切苦惱衆生。示応化身。迴入生死園煩惱林中。遊戲神通至教化地。以本願力迴向故。菩薩如是修五門行。自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提故。(大正三八・五七七下〜五七八上)

これらの文の中で指標となるのが、「菩薩如是修五門行」である。古写本では、「菩薩如是修五門行」、「論註」抽出本や『論註』では、「菩薩如是修五念門行」となっており、ここでは古写本の系統を支持している。

次に智昇『集諸經禮懺儀』に引用された『論』を見てみよう。

・又如天親淨土論云。若有願生彼国者勸修五念門五門若具定得往生。何者為五。一者身業禮拜門。(中略) 二者口業讚歎門。(中略) 三者意業憶念觀察門。(中略) 四者作願門。(中略) 五者迴向門。(大正四七・四六六中)

・依天親菩薩願往生禮讚偈二十拜(中略)

世尊我一心 歸命尽十方 無礙光如來 願生安樂国 (中略)

觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虚空 廣大無辺際 (中略)

正道大慈悲 出世善根生 淨光明滿足 如鏡日月輪 (中略)

備諸珍宝性 具足妙莊嚴 無垢光焰熾 明淨曜世間 (中略)

宝華千万種 弥覆池流泉 微風動花葉 交錯光乱転 (中略)

宮殿諸楼閣 觀十方無礙 雜樹異光色 宝欄遍廻遶 (中略)

無量宝交絡	羅網遍虚空	種種鈴舂響	宣吐妙法音 (中略)
梵音悟深遠	微妙聞十方	正覺阿弥陀	法王善住持 (中略)
如来淨華衆	正覺花化生	愛樂佛法味	禪三昧為食 (中略)
永離身心悩	受樂常無間	大乘善根界	等無譏嫌名 (中略)
女人及根欠	二乘種不生	衆生所願樂	一切能滿足 (中略)
無量大宝王	微妙淨花台	相好光一尋	色像超群生 (中略)
天人不動衆	清淨智海王	如須弥山王	勝妙無過者 (中略)
天人丈夫衆	恭敬遶瞻仰	雨天樂花衣	妙香等供養 (中略)
安樂国清淨	常転無垢輪	一念及一時	利益諸群生 (中略)
讚仏諸功德	無有分別心	能令速滿足	功德大宝海。(大正四七・四七〇下〜四七一上)

ここでは善導『往生礼讚偈』と全く同様である。すなわち、古写本の系統である。

以上、唐代の『論』テキスト受容状況をまとめると、残念ながら竜興、迦才の見た『論』は確定できなかったが、道綽は『論註』そのもの、善導や智儼、智昇は古写本を参照したことが明らかとなった。もちろん、これ以外の諸師(懐感、窺基など)がどの『論』テキストを参照していたのか手掛かりとなる文を引用していないため確定的なことは言えないが、唐代には主に古写本の系統テキストが参照されていたことは確実である。

五、唐末五代、宋代の諸師が見た『無量寿経論』テキスト

唐末五代、宋代においては延寿『万善同帰集』・『宗鏡録』、知礼『観無量寿仏経疏妙宗鈔』、元照『観無量寿仏経義疏』・『仏説阿弥陀経義疏』、宗暁『楽邦文類』が『論』を引用している。この中で、延寿『万善同帰集』²³、知礼『観無量寿仏経疏妙宗鈔』²⁴、元照『観無量寿仏経義疏』²⁵、元照『仏説阿弥陀経義疏』²⁶はその『論』引用文からは手掛かりがつかめない。したがって、ここでは延寿『宗鏡録』、宗暁『楽邦文類』について検討していく。

まず、延寿『宗鏡録』に引用される『論』は、結論から言えば、『論』本文ではなくて、『論註』そのものである。天親云。広略相入者。諸仏有二種身。一法性法身。二方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出法性法身。此二種身。異而不可分。一而不可同。是故広略相入。(大正四八・五三五中)

ここでは、「天親云」と明記しているが、上記の文は『論』に見当たらず、『論註』の本文なのである。すなわち、
 ・広略相入諸仏菩薩有二種法身。一者法性法身。二者方便法身。由法性法身故生方便法身。由方便法身故顯出法性法身。異而広略相入。(真宗勸学寮(一九二五)下巻三九頁)

とある。ここでは多少の字句の異同は認められるが、延寿が『論』ではなく、『論註』を見ていたことは間違いない。²⁷

次に宗暁『楽邦文類』を見てみよう。

- ・無量寿論 往生偈及五門修法。(大正四七・一五〇中)
- ・無量寿優波提舍論一卷 堂字函 婆藪婁豆菩薩造。元魏天竺三藏菩提留支訳。(大正四七・一五一上)中)

・天親論女人根欠不生。(天正四七・一五三中)

無量壽論 往生偈及五門修法天親菩薩

世尊我一心 歸命尽十方

無量光如来 願生安養国

觀彼世界相 勝過三界道

究竟如虚空 廣大無辺際

正覺阿弥陀 法王善住持

如来淨華界 正覺華化生

愛樂仏法味 禪三昧為食

永離身心惱 受樂常無間

大乘善根界 等無譏嫌名

女人及根欠 二乘種不生

衆生所願樂 一切能滿足

故我願往生 阿弥陀仏国

我作論説偈 願見弥陀仏

普共諸衆生 往生安樂国

若人修行五念門成就者。畢竟得生安樂国土見阿弥陀仏。一者礼拝門。身業礼拝阿弥陀仏。為生彼国意故。二者讚嘆門。口業讚嘆彼仏光明智相。欲如実修行相應故。三者作願門。心常作願。一心專念畢竟往生。欲如実修行奢摩他故。

四者觀察門。以智慧觀察。欲如実修行毘婆舍那故。一觀察彼国土莊嚴。二觀察彼仏莊嚴。三觀察彼諸菩薩莊嚴。五迴向門。所有功德善根。以方便迴向攝取衆生。不捨一切世間故。又觀察門三種莊嚴。略説入一法句。謂清淨句。眞実智慧無為法身故。菩薩如是修五門。自利利他。速得成就菩提故。(大正四七・一六三中下)。

この中では宗暁がどの『論』テキストを参照していたのかを示唆するものは次の四つである。すなわち、「堂字函」、「故我願往生 阿弥陀仏国」、「所有功德善根。以方便迴向攝取衆生。不捨一切世間故。」「菩薩如是修五門。」である。

まず「堂字函」であるが、これは『論』テキストに対して付された千字文の整理番号である。したがって、「一切経」所収であることを示している。さらに言えば、「堂」に収められている『論』テキストは宋版大蔵経である。また、「故我願往生 阿弥陀仏国」であるが、これを支持しているものは、古写本と宋版大蔵経である。『論註』抽出本や『論註』では「是故願生彼 阿弥陀仏国」となっている。また、「所有功德善根。以方便迴向攝取衆生。不捨一切世間故。」においては宋版大蔵経では、「所有功德善根以巧方便迴向攝取衆生不捨一切世間故」となっているのに対して。古写本や『論註』抽出本、『論註』では「不捨一切世間苦惱衆生心常作願迴向為首(得)成就大悲心故」となっていて、宋版大蔵経を支持している。さらに「菩薩如是修五門。」では『論註』抽出本や『論註』は「菩薩如是修五念門。」となっているが、古写本や宋版大蔵経では「菩薩如是修五門。」となっている。これらのことから宗暁は宋版大蔵経所収の『論』テキストを参照したことは疑いない。

以上のことをまとめると、唐末五代、宋代では、『論註』や宋版大蔵経所収『論』テキストが参照されていたのである。

六、結論

以上、考察してきたことをまとめると、①曇鸞は我々が現在手にする古写本の祖本ではなく、自ら著した『論註』もしくは『論註』抽出本を座右に置いていた。②隋代においては『論註』、古写本系の両者を確認することができた。特筆すべきは古写本系が明らかとなったため、訳出後、すでに早い時期に『論註』系と古写本系の二系統の『論』テキストが流布していたことになる。③唐末五代、宋代では、『論註』や宋版大藏經所収『論』テキストが確認できたのである。これらのことから、『論』訳出後より唐末五代までいずれの時代にも『論註』系が確認されたことから中国では主に流布本として定着したのは、『論註』系のテキストであると考えられるのである。また、以前に辻本〔二〇一七①〕において新羅に伝わった『論』テキストを調査したが、新羅では『論註』が伝わった形跡は全くなき、『論註』抽出本テキストが伝わったことが明らかとなり、辻本〔二〇一七②〕では日本（奈良・平安時代）の『論』テキストを調査したが、その結果、日本では『論註』抽出本テキスト、古写本テキストの二種が存していたことが判明したのである。ということは中国、韓半島（新羅）、日本には共通して『論註』抽出本テキストが広く伝播していたことになる。⁽²⁸⁾

註

- (1) 『無量寿経論』の題名については辻本〔二〇一〇〕、大竹〔二〇一一〕を見よ。
- (2) 柴田〔一九九六〕〔一九九七〕に詳しい。

(3) 辻本(一九九九)を見よ。

(4) そもそも『無量寿経論』が漢訳されたとされる年代も二説ある。すなわち、西暦五二九年説と西暦五一三年説とである。筆者は、菩提流支によって二度漢訳されたと考えている。これに関しては辻本(二〇一一②)を見よ。

(5) 筆者は現在のところ『論』諸テキストとして宋・東禅寺版、宋・開元寺版、宋・思溪版、宋・磧砂版、元・杭州版、高麗再雕版、明・永楽版、明・洪武南蔵、清・龍蔵、頻伽大蔵経、中華大蔵経、大日本校訂大蔵経、大日本統蔵経、大正大蔵経に入蔵されているもの、中国・房山雷音洞や房山雲居寺の石刻本、正倉院聖語蔵、金剛寺一切経、七寺一切経、鎌倉光明寺寂恵書写本、常楽寺存覚書写本、『浄土宗全書』、『浄土真宗聖典七祖篇(原典版)』、『真宗聖教全書』、親鸞加點本『論註』、計二五本をその写真版やコピーを蒐集している。これらの『論』諸テキストを詳細に对照させると、字句の異同、改行箇所などにより、次のような系統(大きく分類すると四系統、さらに細かく分類すると八系統になる)に分類できるのである。すなわち、

- ・ A1系統 宋版・「東禅寺版」(東寺) 所収本
 宋版・「開元寺版」(知恩院) 所収本
 房山雷音洞石刻本(「願生偈」のみ)
- ・ A2系統 宋版・「思溪版」(増上寺) 所収本
- ・ A3系統 宋版・「磧砂版」所収本
 元版・「杭州版」(増上寺) 所収本
 明版・「洪武南蔵」所収本
- ・ A4系統 明版・「永楽北蔵」所収本

明版・「嘉興藏」所収本

清版・「龍藏」所収本

・ B1系統 高麗版・「高麗再雕版」(増上寺) 所収本

房山雲居寺石刻本所収本

「中華大藏經」所収本

「大正新脩大藏經」所収本

・ B2系統 「大日本校訂大藏經」所収本

中華民国・「頻伽藏」所収本

・ C系統 親鸞加點本『無量寿経論註』抽出本

(流布本系)

鎌倉光明寺所藏寂恵書写本

京都常樂寺所藏存覚書写本

『浄土宗全書』第一卷所収本(義山版を底本とする)

『浄土真宗聖典七祖篇(原典版)』所収本(兵庫泉毫撰寺所藏永享九年本を底本とする)

『真宗聖教全書』第一卷(三経七祖部)所収本(底本は京都常樂寺所藏存覚書写本)

・ 古写本系 正倉院聖語藏本(平安時代)、七寺一切経写本(平安時代後期)、金剛寺一切経写本(鎌倉時代)

(6) 辻本(二〇一一②)を見よ。

(7) 曇鸞の用いた『論』テキストが、『論註』抽出本であった場合、曇鸞が菩提流支より授かった『論』テキストは古

中国における『無量寿経論』テキストの受容

写本系の『論』テキストでは決してないということになる。これについては辻本〔二〇一②〕を見よ。

- (8) 天親作往生偈。女人根欠及二乗種。皆不得生。(大正三七・一〇七下)。
- (9) 天親浄土論云。女人及根欠二乗種不生。(大正三七・二五一七)。
- (10) 六浄土論説有五門。一身業礼拝門。二口業念仏門。三意業觀察門。四発願門。五迴向門。(大正四七・三九下)、浄土論言。身業恭敬門。礼拝阿弥陀仏。(大正四七・五四上)、又浄土論言。女人及根欠二乗種不生。(大正四七・五八下)、浄土論云。大乘善根界等無譏嫌名女人及根欠二乗種不生。(大正四七・六二上)。
- (11) 故往生論云。一礼拝門。二讚歎門。三作願門。四觀察門。五迴向門。(大正三七・三〇八上)。
- (12) 故無量寿経論言。女人及根欠二乗種不生。(大正三八・二七四上)、天親浄土論無著往生論与。言報土女人及根欠二乗種不生。(大正三八・二七七上)。
- (13) 無量寿論云。女人及根欠。二乗種不生。(大正四五・三六四下)、世親菩薩浄土論云。女人及根欠。二乗種不生。(大正四五・三七〇下)、無著天親浄土論言。女人根欠二乗種等皆不生故。(大正四五・三七一下)。
- (14) 無量寿論云。此即地莊嚴宝欄周匝圍繞。(大正三七・三一九中)、無量寿論云。空莊嚴也。無量宝絞絡羅網遍虚空。(大正三七・三一九下)、無量寿論云。水莊嚴也。(大正三七・三一九下)、無量寿論云。雨莊嚴也。(大正三七・三二〇下)、無量寿論曰。又分有二。初明如来功德莊嚴。次明菩薩功德莊嚴。(大正三七・三二三上)、若無量寿論修五念門成就亦得往生。一礼拝門。謂身業礼拝。二者讚嘆門。謂口業讚嘆也。三発願門。心常願往生。四觀察門。以智慧觀察彼国仏及菩薩故。五迴向門。不捨一切苦惱衆生故。(大正三七・三二六中)。
- (15) 無量寿論云。為地莊嚴也。(大正三七・三三九中)、問浄土論云。女人及根欠二乗種不生。(大正三七・三四三中)。
- (16) 浄土論云。大乘善根界。等無譏嫌名。女人及根欠。二乗種不生。(大正四七・一〇七下)、如浄土論。二乗種不生。

(大正四七・一〇七下)。

(17) 故淨土論云。備諸珍寶性 具足妙莊嚴。(大正五三・三九七下)、淨土論云。觀彼世界相 勝過三界道。(大正五

三・三九七下)、故淨土論云。土有五種。一純淨土。唯在仏果。二淨穢土。謂淨多穢少。即八地已上。三淨穢亭等土。

謂從初地乃至七地。四穢淨土。謂穢多淨少即地前性地。五雜穢土。謂未入性地。第五人見後一不見前四。第四人見後

二不見前三。第三人見後三不見前二。第二人見後四不前見一。第一仏上下五土悉知悉見也。(大正五三・三九八上

中)、如淨土論云。一者禮拜。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向。(大正五三・三九八中)、優波提舍論偈

云。觀彼世界相 勝過三界道 究尽如虛空 廣大無邊際 正道大慈悲 出世善根生 淨光明滿足 如鏡日月輪。(大

正五三卷・三九九上)、往生論云。若善男子善女人修五念成就者畢竟得生安樂国土見彼阿彌陀仏。何等為五。一者礼

拜。二者讚歎。三者作願。四者觀察。五者迴向。(大正五三・九八七中)。

(18) 故淨土論云。備諸珍寶性 具足妙莊嚴。(大正五四・三下)、淨土論云。觀彼世界相 勝過三界道。(大正五四・四

上)、優波提舍論偈云。彼世界相 勝過三界道 究尽如虛空 廣大無邊際 正道大慈悲 出世善根生 淨光明滿足

如鏡日月輪。(大正五四・四中)。

(19) 往生論偈云。觀彼世界相 勝過三界道 究尽如虛空 廣大無邊際。正道大慈悲 出世善根生 淨光明滿足 如鏡日

月輪。(惠谷(一九七六)三四六)。

(20) 問論女人根欠不生。(中略) 論說女人根欠不生者。(大正三七・一九三中)。

(21) 又無量壽經論云。念仏有五種門。何者為五。一者禮拜門。身業專礼阿彌陀仏。二者讚歎門。口業專称阿彌陀仏名号。

三者作願門。所有礼念功德唯願求生極樂世界。四者觀察門。行住坐臥唯遣觀察阿彌陀仏速生淨土。五者迴向門。但念

仏礼仏功德唯願往生淨土速成無上菩提。(大正四七卷一二一下)、往生論云。女人及根欠二乘種不生。(大正四七卷一

- 二六下)、又往生論云。觀彼世界相 勝過三界道 究竟如虛空 廣大無辺際。(大正四七卷一三〇中)。
- (22) 房山雷音洞石刻本の字句と一致するが、善導はこの石刻本を見ていない。何故ならば、善導は『論』の長行(散文)も引用しているが、この石刻本には残念ながら長行(散文)が刻されていないからである。
- (23) 往生論云。遊戲地獄門者生彼國土得無生忍已。還入生死國。教化地獄。救苦衆生。以此因緣求生淨土。(大正四八・九六六下)。
- (24) 無量壽經論。今云往生論是也。天親所造有十七成就。至第十六大義門成就中。偈云。大乘善根男。等無譏嫌名。女人及根欠。二乘種不生。長行釈云。故淨土果報離二種譏嫌過。一者體。二者名。體有三種。一二乘人。二女人。三諸根不具人。無此三種過故名離譏嫌也。名亦三種非但無三体。乃至不聞二乘女人諸根不具三種名故。(中略)彼論二乘種不生。(中略)論偈女人根欠不生之文。(大正三七・二二八中)。
- (25) 故往生論云。二乘種不生。(大正三七・二八〇上)、往生論云。二乘種不生。(大正三七・三〇一中)、問往生論。女人根欠皆不得生。(大正三七・三〇四下)。
- (26) 往生論説。二乘不生。(大正三七・三六一中)。
- (27) 柴田(一九九七)は、『宗鏡録』に引用されている『論』は、道綽『安樂集』の孫引きではないかと指摘している。しかし、筆者の調査したところ、『宗鏡録』に引用されている文と道綽『安樂集』は、完全に一致せず、孫引きの可能性は低いとの結論に至った。詳細については辻本(二〇一五)を見よ。また、牧田諦亮・直海玄哲・宮井里佳(一九九五)は「宋代になると、『安樂集』は、存在していたかどうかは、もはや、不明である」とする。しかし、『宗鏡録』に引用されている『論』は、道綽『安樂集』の孫引きとする柴田説を採れば、『安樂集』は宋代にも存在していたことになる。

(28) しかし、菩提流支の訳出した『論』オリジナルに関しては古写本との関係を考察する必要がある。

参考文献

- 恵谷 隆戒(一九七六)『浄土教の新研究』山喜房仏書林
大須賀秀道(一九二七)「浄土論の訳本に就いて」『仏教研究』第八卷第四号
大竹 晋(二〇一一)『法華経論・無量寿経論他』大蔵出版
落合 俊典(二〇〇九)「敦煌の仏典と奈良平安写経―分類的考察―」高田時雄編『漢字文化三千年』臨川書店
梯 信曉(二〇一二)『インド・中国・朝鮮・日本浄土教思想史』法蔵館
岸 一英(一九九九)『無量寿経論』校異の意義』『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所
柴田 泰(一九九六)「中国仏教における『浄土論』」『浄土論註』の流伝と題名(一)』『印度哲学仏教学』第一一号
柴田 泰(一九九七)「中国仏教における『浄土論』」『浄土論註』の流伝と題名(二)』『印度哲学仏教学』第二二号
真宗勸学寮編(一九二五)『浄土論註校異』真宗勸学寮
真宗教学研究所編(一九七二)『浄土論註総索引』東本願寺出版部
大蔵会編(一九六四)『大蔵経―成立と変遷―』百華苑
高瀬 承厳(一九一七)「類本往生論に就きて」『仏書研究』第二九号
玉置 韜晃(一九三〇)「浄土論研究序説」『顕真学報』第一号
塚本 善隆(一九三五)「石刻山雲居寺と石刻大蔵経」『東方学報』京都第五冊副刊
辻本 俊郎(一九九九)『無量寿経論』テキスト考』『無量寿経論校異』佛教大学総合研究所

- 辻本 俊郎 (二〇〇一) 『天台系論書に引用される『無量寿経論』について』『アジア文化学科年報』第四号
- 辻本 俊郎 (二〇〇二) 『華嚴系論書に引用される『無量寿経論』について』『仏教学会紀要』第一〇号
- 辻本 俊郎 (二〇〇四) 『無量寿経論』の流传』『印度学仏教学研究』第五二卷第一号
- 辻本 俊郎 (二〇〇六) 『無量寿経論』の諸本について』『アジア文化学科年報』第九号
- 辻本 俊郎 (二〇一〇) 『世親『無量寿経論』の題名をめぐって』『東アジア研究』第五四卷
- 辻本 俊郎 (二〇一一①) 『無量寿経論』諸本対照』私家版
- 辻本 俊郎 (二〇一一②) 『無量寿経論』と Bodhiruci』『アジア学科年報』第四号
- 辻本 俊郎 (二〇一四) 『無量寿経論』写本テキストをめぐって』『東アジア研究』第六一 号
- 辻本 俊郎 (二〇一五) 『世親『無量寿経論』と道綽『安楽集』、迦才『浄土論』』『東アジア研究』第六三号
- 辻本 俊郎 (二〇一七①) 『新羅における『無量寿経論』テキストの受容』『東アジア研究』第六六号
- 辻本 俊郎 (二〇一七②) 『平安時代における『無量寿経論』テキスト —天台浄土系論書よりみて—』『仏教学会紀要』第二二号

佛敎大学総合研究所「浄土敎の総合的研究班」研究班 (一九九九) 『無量寿経論校異』佛敎大学総合研究所

牧田諦亮・直海玄哲・宮井里佳 (一九九五) 『道綽—その歴史像と浄土思想—』『浄土仏敎の思想』第四卷 曇鸞・道綽』講